

表紙デザインとともに振り返る Isotope News 創刊 70 年の歩み

	月	概要	表紙
1951年	5月	日本アイソトープ協会の前身である日本放射性同位元素協会が設立	
1952年	7月	協会ニュースとして No.1 創刊 初期の頃は科学研究所（現・理化学研究所）山崎研究室の研究者で作成・発行。その後、幹事・事務局の持ち回りで作成・発行	
1957年	1月	毎月発行開始（1952～1956年は不定期発行）	
1962年	11月	協会ニュース 100号記念座談会 (No.100)	
1964年	6月	論壇や見聞記など、輸入配分のお知らせの他、読み物を掲載する等体裁変更 (No.119)	
1968年	11月	編集委員会を組織 Isotope news と改題し、表紙を RI に関係する写真にし、内容は読み物を中心にしてリニューアル (No.174)	
		第1代編集委員長： 山崎文男氏（理研名誉研究員）就任	
1972年	1月	核図表をデザインしたカラー表紙に変更。 湯川・朝永対談 (No.210)	

	月	概 要	表 紙
1976年	5月	創立 25 周年増刊号 (No.264)	
1977年	1月	表紙変更 (青と白) (No.271)	
1981年	5月	創立 30 周年記念号 (No.323)	
	11月	第 2 代編集委員長： 山縣登氏 (国立公衆衛生院名誉教授) 就任	
1982年	1月	表紙変更 (薄緑とベージュの曲線) (No.331)	
1985年	1月	表紙変更・紙質変更 (4 色格子) (No.367)	
1986年	6月	第 3 代編集委員長： 山口彦之氏 (東京大学名誉教授) 就任	
1992年	1月	表紙変更 (電子をモチーフ) (No.451)	

	月	概要	表紙
1996年	2月	500号記念号 (No.500)	
2001年	11月	創立50周年記念号 (No.571)	
2004年	1月	第4代編集委員長： 中澤正治氏（東京大学教授）就任	
2006年	6月	第5代編集委員長： 柴田徳忠氏（東京大学名誉教授）就任	
2009年	1月	第6代編集委員長： 小島周二氏（東京理科大学名誉教授）就任	
2016年	4月	隔月刊（偶数月発行）・表紙変更（地球儀）， A4判サイズに。(No.744)	
2017年	1月	特別号1号（以降毎年1月発行）	
	1月	第7代編集委員長： 二ツ川章二氏（前協会常務理事）就任	

	月	概要	表紙
2017年	4月	表紙変更（原子核），キャッチコピー追加（No.750） 『アイソトープ・放射線の“今”と“これから”がわかる広報誌』	
2018年	1月	特別号2号表紙変更（隔月刊に合わせたデザイン）	
2021年	4月	第8代編集委員長： 上菘義朋氏（協会常務理事）就任	
2022年	6月	創刊70年記念コーナー掲載（No.781）	

Isotope Newsライブラリーを公開しました

1952（昭和27）年の創刊号から現在までの「協会ニュース」「Isotope News」を会員の方限定で公開しております。電子ブックで閲覧・ダウンロードができます。貴重な記事の数々をぜひご覧ください。

協会ホームページ「会員マイページ」からログインし
「広報誌」内の「Isotope Newsライブラリー」をクリック！

会員マイページ ⇒ <https://jrm.jrias.or.jp/mypage/login/login>



当協会の歴史と共に歩んできた本誌は、お陰様で70年の節目を迎えました。これからも「放射線・RIの“今”と“これから”がわかる広報誌」として、最新トピックスと役立つ情報を読者の皆様にお届けしてまいります。今後ともご愛読いただければ幸いです。

（Isotope News 編集事務局）

Isotope News を編集して～歴代編集委員長コメント～

80 歳を過ぎて

(株)千代田テクノロ 大洗研究所
柴田 徳思 (Shibata Tokushi)

昨年の誕生日に 80 歳を迎えた。80 歳を超えるとそれまでと異なり、かなりの変化を感じている。僕は小さい時から視力が大変悪く、母親は、僕が物を見るときに、目の前に近づけて見ていたと言っていた。このせいだと思っているが、距離感が悪く、飛んできたボールを見ても距離がつかめず球技は苦手、スポーツは普段ほとんどしていない。40 歳を過ぎたころ、少しは運動をしなければと思い、毎朝、室内で 1 時間余りの運動を始めた。朝 1 時間余り運動をするには早朝 4 時頃から行うので、いつも早寝で晩の 8 時半頃には寝ている。スクワットを主に行う運動と腹筋や腕立伏せなど組み合わせた 2 種類の運動を毎週 5 日くらい交互に行っている。スクワットは 400 回した後、体を後ろへ思いっきり反らせる運動を 100 回していて、以前は、身体を反らせたときに、最後には床と壁の境目が見えていたのが、80 歳を超えてからは、見えるところが床と壁の境より 15 cm 上でないと見ることができなくなった。

毎週の日曜日には、夕方テレビで「サザエさん」を見ている。30 分の間に 3 話が放送される。見終わったときに、この 3 話の内容を思い出そうとしても、なかなか思い出せない。かなり努力をしてようやく 3 話を思い出すが、時には思い出せないこともある。

僕が *Isotope News* の編集委員長をしていた頃は、このようなことは無く、運動にしても、記憶力にしても、何の苦労もなくできていた。

運動の結果、腕の筋肉や太腿の筋肉はかなりついている感じがする。毎日、このような運動を続け、がんにかかったり大事故に遭ったりすることが無ければ、あと 1～2 年以内に死ぬことは無いという感じがする。このような毎日の運動が長寿命につながるという根拠はないと思うが、いつまで続けることができるか 1 つの試みとして今後も続けたいと思っている。



前列左から柴田徳思第 5 代委員長、小島周二第 6 代委員長、海老原充委員、
後列左から古田悦子、岡田淳一、吉永信治、高橋浩之各委員
(2008 年 12 月)

編集委員会での“ストレスと笑い”

東京理科大学名誉教授
小島 周二 (Kojima Shuji)

私は 2004 年 3 月～2008 年 12 月まで編集委員 (ライフサイエンス・理工学)、その後 2009 年 1 月～2016 年 12 月まで編集委員長として、延べ 12 年間 *Isotope News* 誌の編集に従事しました。委員長退任後、早や 5 年以上が経過し、当時のことも忘れつつありますが、深く印象にあるものを紹介させていただきます。

まず第一に、多少大変だったこと；私のみならず本誌の他分野にわたる読者の皆様に興味を持っていただけるであろう“トピックス”記事候補の探索でした。朝刊及び夕刊 (特に科学欄)、大学では昼休みでのネット検索、更に編集委員会 1 週間程前に事務局から届く、放射線関連の新聞報道の記事レジュメの確認がありました。私が日々の探索で見落としした記事候補を追加した掲載企画提案書を事前に事務局へ送り、編集委員会に備える必要がありました。他の編集委員からのご提案は低調だったため、責任が重かったです。

第二に、編集メンバーの皆さんと大笑いしたこと；

2008年1月号より“特別企画”として“アイソトープ川柳”を掲載することになりました。この背景としては、本誌の読者を放射線関係者から一般人にまで広げようというRI協会からの要望があったことに起因します。公募しますと、初期の頃は90句前後（会員9割、一般人1割程度）の応募でしたが、最後の回に近くなると一般の川柳愛好家からの投句も増え240近く集まりました。一般人からの投句は、川柳の三要素「うがち」、「かるみ」、そして「おかしみ」が読み取れるものでしたが、会員からのものには、ロマンチックな“俳句”、“おやじギャグ”、“施設内掲示標語”、と言ったものもあり、編集メンバーの“大笑い、含み笑い、薄ら笑い”で、編集委員会を終えることができました。

この12年間の編集に従事して、放射線管理・作業従事者の皆様の“クソ真面目”さが再確認され、これが我が国の事故のない放射線管理・利用に繋がっているものと思われました。

最後に、当時の優秀な本誌編集事務局の皆様に改めて心から感謝申し上げます。

広報誌 *Isotope News* の役割

アルファ・タウ・メディカル株式会社

二ツ川章二 (Futatsukawa Shoji)

記録によると、*Isotope News* は、RI配分等の事務連絡を主体とした協会ニュースをスタートに、RI利用の普及拡大のためRI利用、放射線安全管理等に係る記事を充実させ日本アイソトープ協会の広報誌の役割を担ってきた。RI等に卓越した知識と経験をお持ちの先生方に編集委員をお願いすることにより、RI関連記事を充実させてきた。一方、公益法人改革に伴う新たな公益社団法人として検討を進める中で、広報誌の発刊責任は協会執行部にあるとし、常務理事であった小生が2017年1月から2021年3月まで編集委員長を務めた。

担当常務理事として*Isotope News*に取り組んだ大きな課題に収支の健全化がある。会員のための広報誌として、会費収入以上の出費を以ての発刊が問題となった。収支改善のため、当時、流行となった電子出版を検討した。広報誌は手元において読んでもらうことが重要として、書物出版は譲らなかった。

結果として、支出削減のため月刊誌を隔月刊誌とするが、読者満足のため記事の更なる充実に努めることとした。2016年4月号から偶数月の隔月間誌とし、1月は新年特別号として企画記事を掲載することとしている。

Isotope News の発刊には事務局職員の活躍が欠かせない。編集委員会へ提案する近況のRI関連記事の検索、執筆原稿の依頼と収集、原稿の校閲、印刷会社への出稿等を担う。原稿校正は印刷会社にお願いすればよいという意見もあるが、*Isotope News* の原稿の校閲はRIに係る知識と出版に係る校正技術を兼ね備えた者が担う必要がある。適切な職員の確保と育成が重要な課題である。

編集委員長時代の特筆できる記事に、ノーベル物理学賞受賞者で日本学術会議会長の梶田隆章先生¹⁾、また、初代原子力規制委員会委員長田中俊一先生²⁾への特別インタビューがある。両先生にはアイソトープ協会にお出でいただき、長時間に及んでインタビューをさせていただいた。すべてを本誌に掲載できなく残念に思うほど充実したインタビューであった。また、昭和26年発足以来、アイソトープ協会の最大のターニングポイントである公益社団法人移行に係る特集記事「公益認定から7年、改めて問う日本アイソトープ協会の公益性」³⁾はアイソトープ協会の原点としての記録を残すことができた。アイソトープとスポーツの繋がりはあるだろうかという疑問からスタートした東京オリンピック・パラリンピックに向けた特集「スポーツと放射線」⁴⁾はユニークな記事としてお届けできた。

Isotope News はアイソトープ協会の広報誌として多くの先生、職員により築き上げられ創刊70年を迎えることができた。今後も、RIの利用、放射線安全に係る記事で読者に有益な情報を提供すると共に知的要求を満足させてほしい。

参考

- 1) 梶田氏インタビュー（2018年8月号 No.758 掲載）
- 2) 田中氏インタビュー（2019年2月号 No.761 掲載）
- 3) 公益認定7年特別座談会（2019年4月号 No.762 掲載）
- 4) “スポーツと放射線”特別企画（2020年6月号 No.769 掲載）

昔の思い出と今の責任

(公社) 日本アイソトープ協会 常務理事
上 蓑 義朋 (Uwamino Yoshitomo)

初めて私が本誌の編集委員会に加わったのは37年前でした。放射線取扱主任者部会（現在の放射線安全取扱部会）の広報委員として、主任者コーナーを間借りしている関係から出席していました。途中で2年の空白がありましたが、7年間、委員長は東京大学農学部山口彦之先生でした。委員も高名な先生ばかりで、一人だけ若輩の私は、先生方の博識に感心しながらお話を伺うだけでした。委員会は夕方からでしたが、おいしいお弁当（当時はケーキも出ました）を食べながら面白いお話を伺えるので、毎月楽しみでした。ある時、「ケーキでなくビールにしたらもっと議論が弾むのではないか」と提案があり、次の会から飲みながらの委員会になりました。たしかに話は盛り上がったのですが、何を決めたかの記憶があいまいになり、2、3回で元に戻りました。おらかな時代でした。

20年以上の空白がありましたが、再び部会の広報

専門委員として、編集委員会に加わることになりました。委員長は東京理科大学薬学部の小島周二先生でした。この頃には話題を集めるのがシステムティックになっており、新聞等の切り抜きを参考に議論していました。もちろん委員の先生方もコメントされますが、委員長がほとんどの記事について解説されるのには感心していました。私の方は相変わらず先生方のお話を拝聴するばかりで、時々「それは面白そうですね」と相づちを入れる程度の寄与でした。委員会にはやはりお弁当が出ました。ある時私の治療の関係でヨウ素抜きという条件が付いたために、いつものおいしい和風弁当は昆布出汁だから駄目だろうとなり、全員が近所のハンバーグ弁当で我慢しました。しかし強い印象のおかげで、その後先生方から「容態はどう？」と優しい言葉をかけていただきました。

約1年前に編集委員長は二ツ川先生から交代しました。私の浅学は変わらず、責任ばかり重いのですが、様々な専門の委員の先生方のお力をいただいて、「放射線・放射能」という切り口は守りつつ、読者の皆様に面白く読んでいただける記事をお届けしていきます。ご愛読ください。



前列左から二ツ川第7代委員長，小島第6代委員長，上蓑第8代委員長，大石晃嗣委員，
後列左から王冰，對間博之，長谷川秀一，古川純，丸野広大各委員
(2016年11月)